

# 修学旅行

撮影・文章 ホームページ制作委員 大平冬也

\*一日目\*

岩手にも冬の寒さが押し寄せる頃、私たちは、早朝特有の一層の寒さの中、それぞれの期待や不安を胸に、西に向かう新幹線へと乗り込んだ。6時間にも及ぶ移動を終え、ついた先は——



——新大阪駅。出迎えた、岩手とは違う生温い空気と、立ち並ぶ壮大なビル街に私たちは息を呑み、同時に、見る機会のない都会の雰囲気、俄かな興奮を覚えていた。



着いた矢先、7グループに分かれバスに乗り込むと、事前を選択した職業研修の場所へ案内された。今回私が選択したのは、「クリエイション」という企業。そこでは『MOBIO』という工業支援の拠点を設置しており、卓越した技術を持った中小企業と、他の企業との商品開発へ向けた斡旋を行っていた。写真のようなブースを設け、商品と技術が出逢える場として活躍中とのことだそう。



初日の最後にバスが着いた先は、『箕面観光ホテル』。山の上に位置しているため、泊まる部屋によっては大阪市街の煌びやかなネオンが目一杯に一望できるそう。



旅行生は互いの部屋を行き来したり、身体を休めたり、トランプや枕投げをしたりと、思い思いの時間を過ごした。そして夜は更け、旅行の熱冷めやらぬまま、初日が終わった。

二日目には奈良公園での東大寺見物と、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、通称『USJ』が私たちを待っていた。

\*二日目\*

翌日 6:00 に起床した私たちは、おのおの準備を整え、8:00 に旅館を出発した。行き先は奈良公園。広大な公園の敷地内には、多くの国宝や世界遺産が点在し、日本を代表する観光地のひとつともあって、旅行生の関心もさぞ高かったことだろう。

奈良公園の特色といえば、なんと言っても野生の『鹿』だ。付近の道路には「鹿の飛び出し注意」との看板さえあるのだから、驚きである。



ごらんの通り、すっかり人間に慣れた鹿がうじゃうじゃいる。名物の鹿せんべいを買っていた旅行生が、鹿の大群に囲まれていたことは言うまでもない。



園内を進み、南大門にそびえ立つ金剛力士像の眼下を過ぎれば、いよいよ東大寺が私たちの目の前に現れた。悠久の時を感じさせるような、孤高の厳格さを秘めた建造物。異国の観光客も大勢訪れており、皆、足を止め、その遥かなる歴史を感じ取っていた。

東大寺には様々な重要文化財が安置されているが、中でもとびきり目を引くのが、奈良の大仏様だろう。



まさに圧巻のスケール。想像していた以上の大きさに、旅行生はあちこちで感嘆の声を漏らしていた。

奈良公園を堪能したあとは、修学旅行最大の目玉と言っても過言ではない、待ちに待った USJ を訪れた。



旅行生は幾つものグループに分かれ、仲良し同士、あるいは部活の仲間同士で巨大なテーマパークを練り歩いた。写真右の中央に見えるツリーは、飾りの数でギネスに載ったとウワサのクリスマスツリーである。ランチを済ませ、私も友人とともにアトラクションやショッピングを楽しんだ。賑わっていた USJ も、夜にはまた違った雰囲気を出していた。

二日目は京都の旅館『銀閣』に宿泊。気さくな従業員らが切り盛りしている、政府公認の和風旅館である。浴場での集団入浴には驚いたが、なかなか新鮮で楽しめた。奈良公園や USJ と、歩き回った疲れを癒すように、その日は眠った。

三日目はタクシーでの京都市内班別研修である。

\*三日目\*

旅行三日目の朝を迎えた。眠たい眼をこすりながらも朝食と支度を済ませ、班ごとにタクシーに乗り、京都市内へと繰り出した。



私たちの班が最初に向かったのは、東映太秦映画村。USJ など至るところで見かけた他校の旅行生や中学生の修学旅行生もおり、映画村は平日の開館前だということに、賑わっていた。



中に入れば、映画「源氏物語」の特集ブースや、ドラマ「水戸黄門」の土産店があったりと、長居すれば時代錯誤に陥りそうな光景が広がっていた。奥の扉を抜ければ、自分がタイムスリップしたかのような、江戸時代の町並みにも出会える。



その一画には東映アニメーションの特設ブースもあり、馴染み深いキャラから、どこか懐かしいと思わせるキャラクターまでを存分に眺めることが出来る。さらにはアニメの原画やポスターなども置かれ、ファン必見のものとなっている。

小雨の中、次に向かったのは、鹿苑寺『金閣』である。



生憎の雨とはいえ、雨に濡れた舍利殿の趣は、また格別であった。傘とカメラを手に、天気とは対照的に曇りのない光沢を放つ金閣の周りを眺め歩いた。



続いては、『龍安寺』。彩色溢れる紅葉の中を行き、優美な石庭を望めば、心が洗われるような心地がした。枯山水の真髓が、あの石庭に表れているのだ。

最後に訪れたのは真言宗の総本山、『東寺』だ。不運なことに、五重塔は改築中とその全景を拝むことは出来なかったが、迫力は充分であった。文化財の保護のためかカメラ撮影は禁止されていた。しかし、あの仏像が森巖と並ぶさまは、今でも脳裏に焼きついている。

京都駅でタクシーの運転手の方に別れを告げ、構内に入れば、ちらほらと四高生の姿が確認できた。他の班も、大体が京都駅を終着にしているようだった。土産という土産を買い漁り、旅館に戻れば、夕食と昨夜と同じ集団入浴が待っており、土産の宅配予約を終える頃には、もう三日目が終わろうとしていた。修学旅行も、明日が最後だ。

四日目、最終日は、二条城と清水寺の観光、そして、岩手への帰郷が待っていた。

\*四日目\*

最終日の朝は、心なしか慌しく感じられた。名残惜しさもあるが、岩手へと戻れる安心感も、同時にあった。

旅館を出て、二条城へ向けバスは発車した。到着して二条城を見ると、少し違和感があった。大阪城など、城のイメージには必ずついてくる「天守」がないからだ、すぐに気付いた。話を聞けば、以前は存在していたが、落雷により消失したのだという。ウグイス張りの廊下を抜け、徳川慶喜が大政奉還を行った場所でその説明を聞いたあと、案外あっさりと二条城を出た。



そして、旅行はクライマックスを迎えつつあった。バスは斜面を登っていき、降りて、さらに坂道と石段を越え、ついに訪れたのは『清水寺』。清水の舞台から京都市街を一望すると、旅行生も観光客もみな興奮に打ち震えている様子だった。幸い飛び降りた者はいなかったが、生存率は 85.4%と、意外と高いらしい……。





音羽の滝や地主神社を見物する人や、順路をぐるりと一周する人、舞台から絶景を展望する人など、楽しみ方はそれぞれ多種多様であったが、私は展望台から清水寺を眺めながら、少し物寂しさを感じていた。濃密な四日間だったが、本当にあっという間に過ぎ去ってしまったような気がした。

やがて、修学旅行最後の昼食を迎えた。



最後の食事とあって、この湯豆腐定食は格段に美味しかった。その前に八つ橋の試食を食べ過ぎたせいで、食べきることは出来なかったが。(笑)

他の生徒も、舌鼓を打ち、会話を弾ませながら湯豆腐をつついていた。

そして京都駅。四日間の修学旅行が、ついに終わろうとしていた。旅行生は長旅の疲れをキャリーケースに預けながら、先生方や旅行会社の方々の話を聞いた。

時間になり、新幹線は京都駅を発った。四高の人々と、他の乗客を乗せて。行きは騒が

しかった新幹線内も、帰りは水を打ったように静まり返っている。新幹線を乗り換え、東北に入る頃には、日はすっかり暮れ、街の灯りの数が徐々に減り、田畑が広がっていくのが見えた。帰ってきた、という実感に、頬が綻ぶのが自分でもわかった。

新幹線を降りれば、あたりはたちまち冷気に包まれた。出発のときと同じように、盛岡駅の構内に並び、解散式を終えた。吐く息の白さに少し喜びつつ、私は帰路についた。他の生徒も続々と駅をあとにしていた。

\*感想\*

関西は馴染みのない地域でしたが、今回の旅行で訪れることができ、良い経験になりました。振り返っているうちに、ほんの何日か前の記憶が舞い戻ってきて、紀行文(?)を書くのが楽しくなりました。上手く出来ているかわかりませんが、修学旅行の楽しさが少しでも伝わっていただければ幸いです。